

年3月に痙攣発作出現、XCTでは異常はみられず、IMPにて2年前の出血巣に一致して血流障害をみると病巣局限部をとらえた。【症例2】38歳、女性、左中大脳動脈塞栓症、発症後8時間目のXCTでは明らかな異常所見はなかったがIMPで左皮質、皮質下の血流障害とcrossed cerebellar disachisisをみとめた。【症例3】46歳、男性、右中大脳動脈閉塞症、術前術後のXCT所見に変化はないが、術後のIMPで血流改善をみとめた。

8. 脳血管性病変に対する¹²³I-IMPの使用経験

鈴木 豊 (東海大・放)
齊藤 齊 山本 正博 (同・神内)

脳梗塞8例、脳内出血3例、モヤモヤ病1例、その他1例の計13症例に¹²³I-IMPによる脳のSPECTを施行し、その結果とX線CTの結果とを比較した。脳梗塞4例、脳内出血1例、モヤモヤ病の計6例で、X線CTで検出された病巣より大きな異常部位がSPECTにより検出された。脳梗塞では、発作後早期に検査した小さな梗塞例であり、モヤモヤ病、脳内出血では、X線CTで検出された病巣とまったく別の部位に、新たな異常が検出された。X線CTで検出された病変の範囲とSPECTで検出された異常範囲が一致した4例の梗塞は、いずれも大きな梗塞症例であった。

¹²³I-IMPを用いたSPECTにより梗塞発作の早期ないし発作以前より病変の局在部位の検出ないし予見できること可能性が示唆された。

10. 多発性囊胞腎の画像診断

穂川 晋 池田 澤 石橋 晃
(北里大・泌)

1972年より1983年までの過去11年間に当科を受診し、多発性囊胞腎との診断を受けた者156名を対象とし、画像診断中心に検討し以下の結果を得た。

- 1) 腎シンチグラム、CTスキャン、超音波断層撮影は、いずれも囊胞腎診断には優れた非侵襲性の検査法であり、このうち後2者は特に有用と思われた。
- 2) 腎シンチグラムでは、血清クレアチニン値5mg/dl以下、クレアチニクリアランス値30L/day以上において有効な診断ができるものと思われる。
- 3) 肝囊胞合併を67.0% (73/109) の高頻度に、脾、

脾囊胞をおのおの6.0%(4/67)に、脳動脈瘤合併を36.4%(8/22)に見ることができた。

11. 陰嚢部RIアンギオグラフィーの有用性

塩山 靖和	神納 敏夫	高島 澄夫
古川 隆	井上 英夫	三上 浩史
深草 駿一		(日赤医療セ・放)
小島 弘敬		(同・泌)

睾丸捻転は速やかな外科的処置を必要とする疾患であるが、急性副睾丸炎との鑑別が難しい。陰嚢水腫も時として、睾丸腫瘍と誤診されることがある。精索静脈瘤は男性不妊の原因の一つとされ、その検出は臨床的に重要である。これらの疾患について、陰嚢部シンチの有用性を検討した。

睾丸捻転、急性副睾丸炎、精索静脈瘤、陰嚢水腫、睾丸腫瘍等の24例に、^{99m}Tc-O₄⁻ 10~20 mCiを静注し、連続撮像および5~20分後の静態像撮像を行った。

睾丸捻転では、睾丸部に一致し円形のcold areaが認められ、hotに描画される急性副睾丸炎とは明確に鑑別でき、治療方針の決定にきわめて有用であった。睾丸腫瘍の多くでは、腫瘍部へのRIの取り込みが、hotに認められ、陰嚢水腫との鑑別が可能であった。精索静脈瘤では、触知できないものでもRI集積を静脈相より認めること、立位で集積の明瞭となることより、存在診断が可能であった。

12. ゴーシェ病のシンチグラム所見

岡田 淳一	山田佳代子	早川 和重
荒木 力	林 三進	内山 曜
		(山梨医大・放)
横山 巍	赤松 功也	(同・整)

ゴーシェ病(Gaucher's disease)は先天性脂質代謝異常症の一型であるが、シンチグラムに関する報告は少ない。今回1例を経験し、そのシンチグラム所見を報告した。

症例：19歳、男性、2歳時脾腫のため脾摘出術をうけゴーシェ病の診断を得た。以後大腿骨などに骨壊死や骨折を繰り返していたが、右膝関節痛が出現し当院受診となった。^{99m}Tc-phytateによるコロイドシンチグラムでは肝腫大および肺へのびまん性集積と左膝関節周囲骨へ

の集積がみられた。これらはグルコセレブロシドを含む網内系細胞（ゴーシュ細胞）の浸潤が疑われる領域であり、集積機序としては同部位での網内系細胞の増殖が考えられた。 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ による骨シンチグラムではゴーシュ細胞の骨髓浸潤に対する骨新生部位に集積がみられた。 $^{67}\text{Ga-citrate}$ シンチグラムではゴーシュ細胞浸潤が強いと思われる骨部に集積がみられたが、その機序については不明である。

14. 全身に広汎な ^{67}Ga 集積増加を認めたサルコイドーシスの1例

岡田 吉隆 大嶽 達 西川 潤一
町田喜久雄 飯尾 正宏 (東大・放)

22歳男性のサルコイドーシスの症例を報告する。胸部X-P上のBHL所見で発見され、全身のリンパ節・耳下腺・涙腺の腫脹、および上肢を中心とする多数の皮下結節を伴っていた。検査所見上は白血球增多・血清P上昇・ACE活性上昇などを認め、また尿崩症も合併していた。 ^{67}Ga シンチグラムにおいて、両側耳下腺・涙腺への取り込み亢進が認められ、さらに頸部・縦隔～両肺門部・鼠径部などにGa集積が見られた。また、上肢を中心とする皮下結節にも明らかなGa集積を認めた。このような皮膚のサルコイドーシス病変をGaで描出した報告は文献上数少ないものである。

16. 血中サイログロブリン測定法の基礎的ならびに臨床的検討

九島 健二 原 秀雄 佐藤 龍次
伴 良雄 (昭和大・三内)

血中サイログロブリン(Tg)濃度を、Henning社製RIA-gnost Tg Kitを用い、基礎的ならびに臨床的検討を行った。インキュベーション時間は、第一16時間、第二1時間、室温で行い、アッセイ内変動係数は10.6%、アッセイ間のそれは10.1%で、交叉性はなく、回収率は良好で、臨床的応用に満足するKitであった。未治療Graves病患者 59.9 ± 55.9 (7.8~200.3)ng/ml、橋本病患者 38.9 ± 23.9 (16.5~88.0)ng/ml、単純性甲状腺腫患者 17.9 ± 15.5 (6.25~67.0)ng/ml、濾胞甲状腺腫患者 97.0 ± 42.4 (36.0~150.0)ng/ml、腺腫様甲状腺腫患者 $107.5 \pm$

110.7 (19.0~320.0)ng/ml、甲状腺癌患者 259.9 ± 370.5 (6.2~800)ng/mlであり、正常者に比して、いずれも有意に高値を示した。甲状腺癌では、7例中2例で800ng/ml以上の異常高値を示した。Graves病では寛解群は、未治療群に比して有意に低値を示したが、正常者よりは高値を示した。抗甲状腺剤投与群では、大量投与群で維持量投与群より高値を示した。

17. TSH-receptor抗体測定法の基礎的ならびに臨床的検討

石川 直文 盧 在徳 小柳 博司
百済 尚子 斎藤一二三 伊藤 國彦
(伊藤病院)
伴 良雄 (昭和大・三内)

TSH受容体抗体の測定にはSmithのKitが現在広く用いられている。われわれは本Kitを用い基礎的ならびに臨床的検討を行った。基礎的検討では、Intra assayおよびInter assayの変動係数はおのおの1.6~12.4%, 2.4~19.6%と比較的良好な結果が得られた。未治療バセドウ病患者の全血清とそれより分離したIgGによるTRAb活性値の比較では、両者には有意な正の相関が認められた。TRAb測定の際の1stインキュベーション時間をプロトコールどおりの15分の他に60分、120分とし、3者のTRAb活性値を比較してみた。3者の平均値をt検定したが有意差はなく、1stインキュベーション時間は従来どおりの15分で問題はなかった。臨床的検討では、バセドウ病とnongoitrous hypothyroidismの両疾患でTRAbが高値を示した。未治療バセドウ病での陽性率は全血清で88.0%, IgGのそれは92.0%と高く、本疾患診断の指標の1つとしてTRAbが使用できると思われた。

18. CEA測定用3RIAキット(ダイナポット、第一、栄研)の比較検討

小堺加智夫 中込 俊雄 丸山 雄三
(東邦大・中放)
金子稟威雄 佐々木康人 (同・放)

今回われわれは同一試料による国産3キット、ダイナポットCEAリアピーズ、CEAキット第一、CEA栄研